

伸ばす



科大学ですが、「北の外語大」の伝統を受け継いだ外国語教育も盛んです。学生による外国語劇の上演も長らく行われ

てきました。そして国際交流も盛んで、1997年2月に設置された国際交流センターを中心として、毎年多くの留学生の受入・派遣を行っています。現在提携校は12カ国17大学にのぼり、その殆どから留学生を受け入れています(2001年秋には在籍者が100名を越えました)。このような留学支援に関する取り組みが評価され、『大学徹底比較マルチバンク2000』(ベネッセコーポレーション)の「留学生支援充実度」ランキングで、国公立大学中第1位に選ばれました。

1999年には地域連携の拠点としてビジネス創造センター(CBC)が設置されました。ここでは、民間からの相談を受けているほか、国内外から研究者を受け入れての共同研究も行っています。

新しい世紀を迎え、本学は創立90周年を経ました。時代の変革を受け、色々な影響が予想されますが、今後も更なる発展を目指し、地域に根ざした様々な活動を行ってゆきたいと考えています。



ビジネス創造センターとは

ビジネス創造センター(略称CBC)は、1999(平成11)年に、新産業創出のための拠点として設置され、翌2000(平成12)年には社会科学系国立大学初の地域共同研究センターとして国の省令施設に格上げされました。CBCの使命は、地域における新規事業・産業の創造・育成や既存事業の活性化です。このことを国立商科大学である本学独自の学術的ノウハウ、ネットワークをもとに、産学官連携により地域経済を活性化することを目標にしています。

例えば新事業の創出とは、平たく言えば「個人や組織が持っている技術やノウハウといったビジネスのシーズ(種)をニーズ(需要・市場)に結びつけること」です。CBCは、この「結びつけ」を実践したり、サポートを行ったりしています。CBCは3つの事業(プロジェクト事業・情報発信事業・高度職業人養成事業)を柱に活動を行っています。プロジェクト事業では、CBCには道内外からビジネスに関する相談が多数寄せられます。これらの相談(シーズ)をニーズとして結実させるための相談(助言・評価・提案など)の他、独自のネットワークにより学内外の専門家・専門機関と結びつけるという役割を担っています。また、これらに関連した共同研究や受託研究などの研究プロジェクトも組んでいます。2000年度には、国立大学としては初めて教官の役員兼業による大学発ベンチャー企業を北海道大学医学部の教官と自ら立ち上げ、同年度中に更にもう1社を北海道大学医学

部と創設しました。2001(平成13)年度には北海道立札幌医科大学とも共同で1社を設立しました。その結果、大学発医療バイオ系ベンチャー3社の役員を兼職することとなり、「学学産連携」に強みを発揮しています。

高度職業人養成事業では、小樽商大以来の「ビジネスを科学する」実学の伝統を受け継いだものです。上述のようなプロジェクトへの本学大学院に在籍する院生(社会人・留学生を含む)の参加を通じ、ビジネス・プロフェッショナルへの養成機能も担っています。また、自治体や民間経済団体・企業などの要請で、経済・経営・産業興しや街づくり等をテーマとする公開講座やセミナーの講師も勤め、啓蒙活動に努力しています。

さらに、建学以来収集してきた北方圏資料、ビジネス創造に関する情報データ・ベースを蓄積・公開しているほか、本学学生による「ビジネス・アイデア・コンテスト」や学生懸賞論文への支援も行なっています。

CBCに更なるご興味のある方と、インターネットを利用されている方は、下記のホームページ(URL)にアクセスしてください。

(ビジネス創造センター長 下川 哲央 記)

ビジネス創造センター

(Center for Business Creation)

小樽商科大学 2号館1F

TEL 0134-27-5290 FAX 0134-27-5293

URL <http://www.otaru-uc.ac.jp/cbc/>

E-mail cbc@office.otaru-uc.ac.jp

国際交流センターとは

心の距離を縮めるために

現在小樽商科大学は、本学で学生が学ぶ英語を含む7つの言語圏をカバーする世界12ヶ国17大学と学生交換協定を結び、学部学生の1年間の交換留学を進めています。その他学部・大学院を合わせ、100名に及ぶ世界各国からの留学生が小樽のキャンパスで学んでおり、近年小樽商大は国際交流が盛んな大学として知られるようになりました。このことは、高校生向けの大学入学説明会でも国際交流に関する質問が絶えず、在学中の海外留学を夢見て本学を目指す受験生が増加している事実にも反映しています。

10年以上前、留学生がまったくいなかったこともある時代を知っている先輩たちは、今のような小樽商大の変貌を目にして隔世の感を抱かれることでしょうか。この変化は一夜にしてなったのではなく、1985年に国際交流委員会が設置されて以来、後援会の基金という財政支援も得て、留学生の受入れと本学学生の派遣のための環境を整えてきた多くの関係者の地道な努力の成果としてあるのです。そして付け加えるならば、この関係者とは、学内の教職員・学生にとどまるものではなく、留学生に物心両面からの支援の手を差し伸べてくださる地域の皆さんでもあるのです。これなくしては、本学の留学生受入れが地域に根ざした国際交流としてこのような発展を見ることはなかったでしょう。

ところで、国際交流とは何なのか。「遠く」には別の人の別の生活がある。時に私たちはそうし

た別の世界を知りたくするし、翻ってそれは別の世界の人にとっても同じはずです。国際交流の「国際」とはinternationalの訳で、nation(s)の交わりを意味しますが、nationは「国」を意味するだけでなく「民」をも意味します。あえて「民際」などとは言いませんが、この交わりには国家から個人まで様々なレベルがあるわけです。なかでも、留学する学生、外国人留学生を受入れる私たちにあっては、異なる文化と歴史を背負って生きる個人との日常レベルでの交流にこそ大きな意義があるはずで

「遠く」の人との出会いは私たちに新しい世界を発見させてくれるし、別な私たち自身に気付かせてもくれます。それは人との出会い一般に共通することで、何も外国人と付き合うことに限られないと言われるでしょう。まさにそのとおりなのです。「遠く」の人との交わりが、私たち日本人同士の交わりと変わらぬものとなるように、心の距離を縮めるための努力と工夫こそが、私たちの国際交流のあるべき姿です。「国際交流」が何か特別な人との付き合いのように受け取られるとしたら、そこには地理上の距離よりも、むしろ心の距離が介在しているからではないでしょうか。

(国際交流センター長 高橋 純 記)

国際交流センター

(International Center)

小樽商科大学 4号館1F

TEL 0134-27-5262 FAX 0134-27-5264

URL <http://www.otaru-uc.ac.jp/kokusai/>

E-mail inl@otaru-uc.ac.jp